

そのつとめてそのいゑのかたはらに、大太郎が去りたりけることのありける家に行たれば、みつけていみじくきやうようして、いつのぼり給へるぞ、おぼつかなく侍りつるなどいへば、たゞいままうできつるまゝに、まうできたるなりといへば、かはらけまいらせんとてさけわかつて、くろきかはらけのおほきなるをさかづきにして、かはらけとりて大太郎にさして、家ある比のみてかはらけわたしつ、大太郎とりてさけをひとかはらけうけてもちながら、この北にはたがゐたまへるぞといへば、おどろきたるけしきにて、まだ去らぬか、おほ矢のすけたけのぶの、このごろのぼりてゐられたるなりといふに、さはいりたらましかば、みなかすをつくして、射ころされなましとおもひけるに、ものもおぼえずおくして、そのうけたるさけをいゑあるじに、頭よりうちかけてたちはしりける、ものはうつぶしにたをれにけり、いゑあるじあさましとおもひて、こはいかに〜といひけれど、かへりみだにもせずしてにげていにけり、大太郎がとられて、むさの去ろのおそろしきよしをかたりけるなり、

〔宇治拾遺物語〕^十これも今はむかし、天曆のころほひ、淨藏が八坂の坊に、強盜その數入みだれたり、去かるに火をともし、太刀をぬきめをみはりて、をの〜たちすくみてさらにすることなく、かくて數刻をふ、夜やう〜あけんとする時、爰に淨藏本尊に啓白して、はやくゆるしつかはすべしと申けり、そのときに盜人ども、いたづらにてにげかへりけるとか、

〔古今著聞集〕^{武九}強盜入たりけるに、貞綱は酒に酔て、白拍子玉壽と合宿えたりけり、思ひもよらぬに、ね所に打入たりければ、貞綱太刀をぬきて打はらひて、玉壽を引立て後苑へ去りぞきて、檜垣より隣へこして、我身も共に逃にけり、其事世に聞えて、強盜に逃たるわろしなどさたえけるを、貞綱かへり聞て、今より後成共、強盜にあひて命うしなふまじ、幾度も君の御大事にこそ命をばおしむまじけれと、いひけるにあはせて、和田左衛門尉義盛が合戰の時、晝は紅のほろをかけ